万葉風歌詠み型アンケートから読む明日香の心象風景

Analysis of Mental Scenery of ASUKA by The Questionnaire Composing a MANYO-Style WAKA

川口友子* 糸長浩司** 栗原伸治** 藤沢直樹*

KAWAGUCHI Tomoko*, ITONAGA Koji**, KURIHARA Shinji**, FUJISAWA Naoki*

(*日本大学大学院生物資源科学研究科, **日本大学生物資源科学部)

(*Graduate School of Bioresource Sciences Nihon Univ., **College of Bioresource Sciences Nihon Univ.)

I はじめに

1 背景と目的

近年、独自の地域環境資源として捉えられている歴史的、文化的な風景・景観を、農村計画的にはどう捉え、どのような「あるべき」風景・景観として形成していくべきかが問われている。その方向性を探る基礎的研究として、筆者らは歴史的な景観形成に取り組んでいる奈良県明日香村を事例として研究を進めている。そして明日香村における「万葉の風景」づくり¹⁾という実際の計画に着目し、万葉集のなかの明日香が詠まれた歌から万葉の時代の心象風景を分析して、今後の「万葉の風景」づくりの課題を抽出したうえで、飛鳥川的重要性を指摘した²⁾。

そこで本論では、現在の明日香村に暮らす人々の心の中にある風景(=心象風景)をアンケート調査結果から読んでいき、現代の明日香村の人々が持つ明日香の「万葉の風景」イメージを、飛鳥川を中心に明らかにしていくことを目的とする。

これまでも、風景・景観研究は数多くみられる。とくに歴史的、文化的視点から論じたものでは、農村風景を日本人の原風景として、生活風景の立場から風景論を展開した勝原の研究³⁾や、風景を各社会固有のアイデンティティとして、それを引き継ぐ新しい風景づくりに際し「造景」という概念を提案したベルクの研究⁴⁾などがある。しかし、いずれも実際のむらづくりや総合計画での景観計画に直接結びつけられるものではない。一

方、実際のむらづくりや総合計画に直接結びつけた研究も数多くみられる⁵⁾。しかし、いずれも歴史的、文化的視点を中心に論じられたものではなく、また心象風景という観点によるものでもない。

これらの研究に対し、本論は心象風景という観点にもとづき、さらに明日香村における歴史的、文化的視点を中心に見据えた、「万葉の風景」づくりの方向を明確にするための基礎的研究である。

2 方法

本論は、明日香村における「万葉の風景」づくりのための景観形成課題を明らかにするために、万葉の時代の心象風景分析研究²⁾との対比的研究として、いわば現代版万葉集の心象風景を分析するものである。

現代版万葉集の心象風景を分析する新しい手法として、「万葉風歌詠み型アンケート」を開発した。このアンケートの結果から、人々の心象風景を構成する要素について分析をおこなう。そのうえでそれらの関係性について考察する。

3 心象風景の定義

心の中の風景を用語に置き換える場合、原風景という語は個人の幼少時代の懐古的な風景につながり、日本の歴史的風土、伝統にも影響され⁶⁾、不変的な意味合いが強い。それに対し心象風景は、人が対象を認知するときの季節、時間帯、場所などの要素で構成される状況の変化、さらに、対象を認識するときの暮らしや経験の成長による心的再構成の変化など、さまざまな要因に影響を受け、心象風景そのものは可変的であると定義できる。

つまり心象風景を読んでいくには、心象風景を構成する要素と、要素をむすびつける状況、理由、きっかけなどを把握することが必要だと考えられる。逆に、以上のような定義の心象風景の概念にもとづけば、構成要素とそれらをむすびつける状況、理由、きっかけなどが文脈によってさまざまにむすびついた計画が可能となると考えられる。

そこで本論では、「万葉の風景」づくりに向けた研究として、心象風景という観点から、万葉の時代の心象風景¹²⁾と対比的に、現代の明日香の心象風景の分析をおこなう。

II 万葉風歌詠み型アンケートの作成と調査：現代版万葉集の作成と調査

1 アンケートの作成

本論では、明日香村における「万葉の風景」づくりに寄与するために、現在の明日香村の人々の心象風景を万葉の歌の形式で表意してもらう方式として「万葉風歌詠み型アンケート」を開発した(図1)。この万葉風歌詠み型アンケートとは、実際に歌を詠むかわりに万葉歌人のように歌を詠むつもりになって、歌に詠みたい季節や場所、その風景の中にある要素、またそれを選んだ理由などを回答していくうちに、歌のイメージが明らかになっていくものである。歌のイメージを構成する

★ つぎに、明日香における『万葉の風景』に対するあなたのイメージについて、お聞きします。まず、明日香村の風景を思い浮かべてみてください。そして、その風景を題材に、万葉歌人のように歌を詠むつもりになってみてください。

問9. まず、歌の中の季節を決めましょう。どの季節の明日香村について歌を詠みますか？下の目盛り上の該当する一箇所に○をつけてください。

問10. 歌の中の時間帯はいつ頃がいいですか？下の目盛り上の該当する一箇所に○をつけてください。

問11. 思い浮かべた風景には地形(山・川・農地)、植物、動物、建物、などがありますか？それはどのようなものですか？あれば記入してください。(自由回答)

図1 アンケート内容の抜粋

季節や時間帯、場所、それを選んだ理由は、回答者の回答時の状況、心情に影響され人によって異なる。つまり各回答者の歌のイメージは、各々がもつ心象風景に由来する、といえる。そのため本論では、万葉の時代の心象風景を読む唯一の手段であった万葉集に対して、この歌詠み型アンケートの結果を現代版の万葉集に相当するものとした。

2 アンケートの調査

「明日香の『万葉の風景』に関するアンケート」という題名で、明日香村文化協会の会員とその家族を対象とした。調査は、明日香村文化協会会長に依頼し、調査票を直接配布する方式をとった。調査票は一世帯に三部ずつ配布し、世帯のなかで、世代、性別がさまざまに異なる三人に回答してもらうようにした。調査期間は2001年11月27日から12月21日とし、郵送により回収した。配布450部のうち有効回答は174部(38.7%)であった。

アンケート対象者の年齢層は、50代(19.0%)、60代(19.0%)が比較的多く、男女比は、女性が二倍近く多かった。居住歴は、戦前から今のところに住んでいる人が24.1%でもっとも多かった。このことから、戦前から明日香村に居住し、その景観・風景の変遷と共に暮らしてきた人が多いといえる。

III 季節、時間帯と心象風景構成要素

この歌詠み型アンケートは、万葉風の歌を詠んでいくようにして、回答者が自らのもつ明日香の心象風景を抽出していく、という設定である¹⁷⁾。

1 歌の中の季節と時間帯

歌の中の季節についての設問では、冬、春、夏、秋とだけ記した円状のグラフに12の目盛りをふり、その目盛り上の該当する一箇所に○をつける形式にした。結果、

秋の目盛り上の○がもっとも多く、38人(21.8%)いた。ついで、春の目盛り上の○が31人(17.8%)いた。○は春と秋の前後に多くみられた。この

図2 心象風景の中の季節

図3 心象風景の中の時間帯

人々の心象風景をつくる季節のイメージとして、秋と春が強い、ということがわかった(図2)。その理由として、秋は彼岸花や紅葉、稲穂など、春は桜やレンゲなど、季節の植物の存在をあげる人が多かった。

歌の中の時間帯についての設問でも、0・12・24とだけ記した目盛り上の該当する一箇所に○をつける形式にした。結果、17時が22人(12.6%)ともっとも多く、つぎに16時が20人(11.5%)と多かった。ついで7時が16人(9.2%)、6時が14人(8.0%)いた(図3)。その理由として、17時、16時では「夕日や夕暮れの時間だから」、7時、6時には「朝日や朝露が美しいから」など、その時間帯独特の太陽のひかり、自然の変化をあげる人が多かった。

2 歌の中の心象風景構成要素

このとき思い浮かべた季節、時間帯の風景を構成する要素、つまり心象風景構成要素について、自由回答(複数回答可)で記入してもらった。この結果、計321の回答がえられ、植物がもっとも

図4 季節ごとの風景要素

多く101の要素(31.5%)があげられた。つぎに、二上山、南淵山などの山(21.5%)、棚田などの農地(15.6%)、川(12.8%)などが多かった。

3 季節、時間帯と心象風景構成要素の関係性

Ⅲ-3で明らかになった、具体的な明日香の心象風景構成要素を季節ごとでみたところ、図4のようになった。ここで、歌の中の季節として選んだ人が多かった秋と春に着目すると、もっとも多かった要素である植物は、秋に多くあげられ、彼岸花、稲などがみられた。春においても、桜、レンゲ、菜の花などがみられた。二番目に多かった構成要素である山も、秋と春にともに多くみられた。また、秋の心象風景構成要素として、農地、とくに棚田が多く、ひとつの風景のなかに季節の植物の要素と農地をつなげてみる人もいた。秋と春の構成要素として両方にでてきた川は、季節にかかわらず多くあげられ、万葉の時代の心象風景とおなじく^{注2)}、現代においても明日香の心象風景の構成要素として、川が重要な要素であることが明らかになった。ここで、歌の中の季節と時間帯とのクロス集計をみると、秋は17時の目盛りを選ぶ人がもっとも多く、ついで16時が多かった。春では8時と10時を選ぶ人が多かった。

以上のことから、現代の明日香の心象風景構成要素として、秋の夕方や春の朝にみられる、山と季節の植物、農地、川が強くイメージされる、ということができる。

IV 場所と心象風景構成要素

1 歌の中に詠みたい明日香の場所

アンケートのなかに明日香の地図をのせ、歌の中に詠みたい場所を囲う、という回答の方式(複数可)の設問をした。結果、全179の回答のうちポイントを囲う人と、エリアを囲う人に分かれたものの、ポイントでは石舞台地区(石舞台古墳)(14.5%)がもっとも多く、ついで甘樫丘地区(10.6%)、稲淵の棚田(7.8%)が比較的多かった(図5)。選んだ理由として、「家からみえる」や「散歩道の途中だから」など、日常生活との関わりをあげる人が多かった。そのほか、石舞台地区と飛鳥川をはさんだ祝戸地区や、棚田のある稲淵、入谷、栢森付

図5 歌の中に詠みたい明日香の場所

図6 「飛鳥川のある風景」の想起地点

表1 詠みたい場所に規定される心象風景の要素

風景の要素	回数	%	網かけ		
石舞台古墳	19	7.63	寺	5	2.01
棚田	17	6.83	石橋(飛び石)	5	2.01
飛鳥川	14	5.62	田	5	2.01
甘樫丘	14	5.62	飛鳥寺	4	1.61
山(山々)	14	5.62	ススキ	4	1.61
二上山	10	4.01	畝傍山	4	1.61
桜	9	3.61	葛城山	4	1.61
大和三山	8	3.21	以下、回数3の要素が1、回数2の要素が16、 回数1の要素が61あげられた。		
板蓋宮跡	6	2.41			
川	6	2.41	計	249	100.0

近とその周辺の飛鳥川に集中した。すなわち、これらが明日香の心象風景の場所だと考えられる。

2 詠みたい場所と心象風景構成要素の関係性

歌の中に詠みたい場所にある構成要素を自由回答(複数回答可)で記入してもらった(表1)。その結果さまざまな要素に分かれたものの、石舞台古墳、棚田が多くあげられ、ついで甘樫丘、飛鳥川、山などが多かった。また、二上山、大和三山などの明日香村外の要素も比較的多くあげられた。これらの要素は、明日香の心象風景をつくる重要な要素である、といえる。さらに要素の位置関係を見ると、明日香村内では飛鳥川が中心となり、源流に近い東南地域にある要素が多くあげられて

いる。一方、明日香村にいながら風景をみる視線は、村外の二上山、大和三山などの北西の山々に向けられていることも多い、ということがわかる。

3 飛鳥川のある心象風景

万葉集の分析²⁾からその重要性が明らかになった飛鳥川に関して、「飛鳥川のある風景」と聞いて思い浮かべる地点、つまり飛鳥川のある心象風景を、IV-1と同様の方式で回答してもらった(図6)。計147の回答は、稲淵付近から上流の源流付近に集中し(42.2%)、ついで、石舞台地区や祝戸地区周辺が多かった。

さらに、飛鳥川のある心象風景の構成要素として116の要素があげられ、石橋(飛び石)(31.0%)が

図7 「飛鳥川のある風景」にある要素の関係性

もっとも多く、ついで綱かけ(12.1%)が多かった。

4 飛鳥川における心象風景構成要素の関係性

飛鳥川における心象風景構成要素は、石橋(飛び石)^{注8)}がもっとも多く、ついで綱かけ、小さな滝などがあげられた(Ⅳ-3)。各回答であげられた数種の要素から、回答数の多い要素を選び、さらに同時にあげられた要素どうしのつながりを図示すると、図7のようになる。

回答の多い要素の大体が、石橋(飛び石)につながりがあることがわかる。さらにこれらの要素の中で、石橋(飛び石)、綱かけ、小さな滝、棚田は、稲淵、栢森などの飛鳥川源流に近い地域にある要素である。このことから、飛鳥川に関わる計画をするうえでこれらの場所、要素が重要であり、飛鳥川源流に注目する必要がある、といえる。

V アンケートにみられた歌詠みの典型

これらの構成要素からなる心象風景は、最終的に完成することができた34首の歌の中にもみることができる。

典型的な歌として例をあげると、ある69歳の女性は、歌の中の季節として「彼岸花、秋の実り、紅葉などがすばらしい」を理由に秋、時間帯に「家事をすませ、自分の時間ができる」を理由に14時を選び、その風景の心象風景構成要素として、川、家屋をあげた。そして、心象風景の場所として飛鳥川上流、大和三山を選び、その風景をつくる要素として、飛鳥川、石橋、大和三山、天武・持統天皇陵をあげた。そして、できあがった歌は

飛鳥川について詠んでいる(①)。

① なが雨に 水かさ増せる 飛鳥川
とよむ岸边に わすれ草咲く

そのほか、19歳の女性は、歌の中の季節に「桜がきれいだから」を理由に春のつぎの目盛り、時間帯に15時の目盛りを「イメージがそうだから」を理由に選び、心象風景構成要素として、石舞台の桜をあげた。そして、心象風景の場所として石舞台地区を選び、その風景をつくる要素として、石と桜をあげた(②)。

② 木もれ日の 光のどけき 春の日に
桜花の香 心やすらぐ

このようにアンケートの設問形式に従って回答していくことで、自然に心に思い浮かべた明日香の風景が、万葉風の歌の形式で表意されてきている。また、季節、時間帯、構成要素、場所などを選んだ理由をみていくと、それらがきっかけとなって構成要素がむすびついている状態を作り出していることがわかる。すなわちアンケートで抽出された明日香のイメージは、それぞれの心象風景に由来している。したがって、この歌詠み型アンケートから心象風景を明らかにできた、といえる。

VI まとめ

本論は、奈良県明日香村における、歴史的、文化的視点を中心とした「万葉の風景」づくりという実際の計画へ向けた基礎的研究として位置づき、現代の明日香の心象風景を構成する要素を、新規の「歌詠み型アンケート」手法にもとづき明らか

にした。つまり、心象風景をいわば現代版の万葉集から読んでいったものである。

その結果、現代の明日香の心象風景構成要素として、季節の植物がみられる秋や春の夕方や朝といった季節、時間帯にみられる、植物と山、農地、川が重要であることがわかった。また、心象風景の場所として、石舞台地区、甘樫丘地区、稲淵の棚田が強くイメージされ、その場所の風景をつくる要素として、石舞台古墳、棚田、飛鳥川、甘樫丘、山などが重要である、ということがわかった。

これら要素の位置関係は、飛鳥川が中心となり、源流に近い村の東南地域に多い、という一方で、明日香村にいながら風景をみる視線は、明日香村外の二上山、大和三山などの北西の山々に向けられていることも多い。さらに、万葉集での心象風景分析からも、その重要性を指摘している飛鳥川に注目すると、飛鳥川のある風景として、稲淵付近から上流の飛鳥川源流地域が多くあげられ、その風景の場をつくる要素として、石橋（飛び石）、綱かけ、小さな滝、棚田などの、飛鳥川源流に近い地域にある要素が重要である、ということが明らかになった。

歌詠み型アンケートをもとに分析したこれらの要素は、明日香の心象風景の中心をなすものである。そして、このまわりに季節、時間などのほかの心象風景構成要素が、理由、きっかけ、状況といった文脈に応じてむすびついていると考えられる。このことは、アンケートにみられた歌詠みの典型からもうかがえた。すなわち、可変的な心象風景に対する、本論で試みた歌詠み型アンケートという方法による分析の有効性が検証できた。この方法によって抽出された要素とその関係性は、今後の「万葉の風景」づくりにおける、計画的なコンセプトの骨子をなすといえよう。

今後は、万葉集での心象風景分析との対比によって、明日香の「万葉の風景」づくりのコンセプトを、空間的に具体化していくことが課題である。

注

- 注¹⁾ 明日香村の総合計画に対して、多くの人々は「万葉の風景」という言葉によって理解している。そこで本論では、むらづくりのテーマとして「万葉の風景」という表現をもちいる。
- 注²⁾ 文献 1)、文献 2)を参照。
- 注³⁾ 文献 3)を参照。
- 注⁴⁾ 文献 4)を参照。
- 注⁵⁾ 文献 5)を参照。
- 注⁶⁾ 文献 3)p.15 を参照。
- 注⁷⁾ 現代の明日香の心象風景を分析していくために、文献 1)、2)で作成した、歌の心象風景構成要素を抽出したシートに相当するような、自らのもつ心象風景の構成要素を抽出していく、歌詠み型アンケートを作成した。つまり、この歌詠み型アンケートの結果として必要なのは、歌そのものではなく、歌を詠んでいく段階で抽出される、心象風景構成要素である。
- 注⁸⁾ ここでいう「石橋」は、稲淵にある石橋を指している。これは「飛び石」という名称で呼ぶ人もいるが、同一の橋を指している。文献 7)にも、「石橋（飛び石）」(p.86)という明記がある。

引用文献

- 1) 川口友子 糸長浩司 栗原伸治 藤沢直樹(2001):「万葉集にみられる明日香の心象風景」、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2, pp.567~568.
- 2) 川口友子 糸長浩司 栗原伸治 藤沢直樹(2001):「万葉集から読む明日香の心象風景」、農村計画論文集第3集, pp.271~276.
- 3) 勝原文夫(1979):『農の美学』, 論創社.
- 4) オギュスタン・ベルク(1990):『日本の風景・西欧の景観』, 講談社.
- 5) 田中晃代 鳴海邦碩 久隆浩(1999):「景観条例・まちづくり条例にもとづく市民団体の活動と支援方策の特性に関する研究-兵庫・大阪・滋賀における景観およびまちづくり条例を事例として-」, 日本建築学会計画系論文集 No.516, pp.193-199.
- 6) 第3次明日香村総合計画(1999), 明日香村
- 7) 犬養孝(1964):『万葉の旅(上)』(現代教養文庫 481), 社会思想社.

付記

本研究は生物環境科学研究センターのプロジェクト研究の一つであり、また、日大学術助成金による「GISを活用した農村環境資源のバイオリージョン的評価に関する基礎的研究」の一環である。

アンケート調査にあたり、明日香村文化協会会長東謙吉氏およびアンケートに回答してくださった方々に感謝を申し上げます。

The previous study was cleared the mental scenery of ASUKA, by interpreting "MANYO-SHU". On the contrary, the purpose of this paper is to analysis the mental scenery of the people who are living in ASUKA today, and to clear their image of "MANYO-SCENERY" depends on the questionnaire investigation.

As a result, it can be said that the relationship between seasons, time in a day, places and compositional elements of mental scenery, by the questionnaire that has the inhabitant living in ASUKA today make MANYO-Style WAKA gradually.